



第2期会長から



「志は大きく、小さな一歩から」

木原 元央
Motohiro KIHARA

つづけて第2期の会長をつとめることになりました。みなさまの暖かい御支援をお願いいたします。

これまでの2年間で当初の活動目標である会誌の発行、年会の開催、学会賞の創設を軌道にのせることができました。自画自賛となりますが、会誌はなかなか読みごたえがあり、とくに歴史シリーズは資料的価値も高く、これからも会誌の目玉の一つとして引き継いでほしいと思います。年会は、短い開催期間の中でのプログラム作りには苦勞があります。しかし、年会に集うことによってとくに若い人たち同士の交流が促進されることを期待します。学会賞の役割も同じところにあります。今後とも、学会が加速器の将来を担う若手研究者の活動の一助となるように心掛けます。

現在、加速器の分野は素粒子、量子ビーム、医療に大きく分類されます。(量子ビームにはなじみがない向きもあるかもしれませんが、放射光、中性子、RIビームなど物質・生命科学に不可欠となった加速器を必要とするプローブのことです。最近、この表現が行政レベルでも使われるようになったので、ここでも使うことにします。) いずれも大きな加速器を必要とし、高工研、理研、JASRI、放医研を中心として計画を進めるという構図が出来上がっています。

いまでは、科学技術予算は重点項目に特化して集中的に配分されています。しかし、科学の進歩にとって、これだけでよいはずはありません。大学改革の号令がかかるなかで大学がそれ相当の規模の加速器をもつことは容易ではありませんが、大学でなければ発揮できない特色を出して、存在感を示して下さい。これまでも、大学、研究所を問わず、メインプロジェクトから外れたところからすばらしい成果の出ている例が少なからずあります。大研究所グループも、大学の貧困はいずれ分野の衰退を招くことを肝に命じ、大学との連携をすすめ、ともに発展するように工夫してほしいものです。

最近の加速器の傾向として、ハードの面でいえば大電力、高電界の限界、またビーム物理の面でいえばビームの集団運動の限界に挑むものが少なくありません。技術的に難しい加速器が多くなっているにもかかわらず、産学合わせた加速器の研究者、技術者の相対的な力はかならずしも昔に勝るとは言えないかもしれない。杞憂ならばめでたいことですが、もしそのおそれがあるとしたら、どうしたらよいでしょうか。ぜひお考え下さい。

志は大きくもって、それに向かって一歩ずつ進めば、かならず結果がついてくるでしょう。会員の皆様の御健闘を祈ります。

最後に一言、御存じの通り、Saga Light Source が昨夏に試運転に成功し、今年の2月に開所式が行われました。われわれの仲間が増えたことをうれしく思います。ここまで努力された関係者に会員一同からお祝いを申し上げます。